

---

# 変態超能力をプレゼント

ヒイツツカラルド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変態超能力をプレゼント

### 【Zコード】

Z2845Y

### 【作者名】

ヒイツツカラルド

【あらすじ】  
もしも、変態になるけど超能力が貰えるとしたら、君は貰いますか？

## プロローグ

すべての授業が終わり、帰宅部の生徒たちが下駄箱の並んだ玄関から見える正門を目指して歩いて行く。

その横で運動部の生徒たちが、青春を費やして取り込む各競技に爽やかな汗を流していた。

県立蓬松高校の、放課後の景色である。

「なあ、龍」

h

## 二人並んで歩く男子生徒。

背の高い生徒が、自分よりも背の低い生徒に話しかけた。

声を掛けられた生徒は、視線を少し上に向けながら返事をした。

背が高いと述べても175センチはある。

背の高い生徒の方が、大き過ぎるのだ。

おそれぐのと1990センチはあるだらう。

「なあ〜、暇ならカラオケでも行かないか？」

「えへ、またかよ……」「

嫌そうな顔で言葉を返す生徒の肩に、長身の生徒が腕を回す。

「いいじゃあねえかよ、行け」

「どうせお前の歌の練習だら、一人で行けよ」

「連れね~こと言つなよな~」

長身の生徒は、身長は高いが細身である。

髪型は坊主頭に近いが金髪に染められており、ブレザーの制服もだらしなく着こなしていた。

若干だがチャライ。

彼の夢は、ミュージシャンに成る事らしい。

しかし、顔は整っている方だが、メロディーは整っていない。

「お~りだつたらいいよ。だつて俺、今月の小遣い、あと一500円しか残っていないんだもん」

今月が始まつて今日は10日目である。

月の小遣いは5000円だが、貰つて直ぐに無駄使いを友好的にしてしまつたのだ。

暫くは糊口をしのがなくてはならない。

「おーいる金が俺に有ると思つか、龍～」

「じゃあ、ひとりで行けよ。俺は一昨日買いまくった本を、家でゆっくり読んでいるからよ」

実のところ、欲しかった本は買いたくない。

「あ～……」

今度は長身の生徒が嫌な顔を浮かべる。

「またオカルト雑誌か？」

「何か文句有るか。俺が世界の不思議に興味を抱いて何が悪い？」

「そんなことだから女にモテないんだよ。龍～はよ～」

龍と呼ばれる少年には彼女が居ない。

今年で高校一年生になる。歳は17だが、一度も彼女が出来たことがない。

顔は悪くは無い。だが、平凡な顔をしている。

成績も悪くは無い。だが、優秀な科目も無い。

スタイルも悪くは無い。だが、オシャレでも無い。

運動神経も悪くない。だが、体育の授業でも立ったこと無い。

性格も控えめなところがあって、自分から前へ前へといった感じはない。

まさに、平凡な高校生である。

その上、異性の前だとやたらと緊張してしまって、会話が上手く出来なくなる。

だから、女子にもモテない。

名前は、まなぶ政所じゆしょ龍一りゅういち。

親しい友達には『龍一』と呼ばれている。語尾を延ばすのだ。

龍一の「の字を、語尾を延ばす意味合いで使っている。

彼はスマートフォンで呼ぶ事を嫌っていた。

小さな頃から『まんじゅう』と言つた前の響きのせいで、随分と揶揄された事があるからだ。

長身の生徒の名前は、おがさわ小笠原おがさわら卓巳たくみ。

龍一とは、高校に入学してから知り合った友達であるが、今では一番の親友と呼べる仲であった。

一年二年と一緒にクラスである。

ちなみに彼には彼女が居る。

二人は何気ない日常の会話をダラダラと交わしながら駅前を目指して歩いていた。

田舎でも都会でもない町並み。  
大通りには車が轟めき合つて走り、背高い近代ビルが立ち並んでいる。

しかし、ビルの脇に在る小道に入つて行けば、100メートルも進まないうちに住宅街に変わる。

一気に下町風景に変わってしまう。

凶悪な犯罪も少ない平和な町であった。

卓巳の自宅は、電車に乗つて三駅越えた先にある。

龍一の家は、駅を越えた裏側の更に20分ぐらい歩いた所にあつた。  
まだ20年ものローンが残つているが、父親自慢の一戸建てである。  
両親と姉での四人暮らしであった。

「じゃあな～、龍～。また明日～」

「またな～」

二人は駅前で別れる。

卓巳は駅の改札口を手指して行くが、龍一は駅前に在る本屋へと足を向けた。

今月の小遣いで買えなかつたオカルト本を立ち読みする為であつた。

龍一が本屋の前に到着すると、不思議そうな顔で足を止めた。

五階建てのビル。

一階二階は、すべて本屋だが、三階テナントには喫茶店と美容院が入つている。

四階五階は、会社事務所が幾つか入つていた。

本屋の名前は『三田邸堂』。

このビルの私有者は、この三田邸堂の店長の父親である。

いつも龍一は、この本屋で本を買つ。

ここで手に入らない本は、顔見知りで仲の良い店長にお願いすると、取り寄せてくれる。

しかも、本が届くと携帯電話にメールで知らせてくれるし、お金がない時は来月の小遣いまで待つてもくれる。

だから龍一は、インターネットで本だけは買ったことが無かつた。

それどころかここ数年は、この本や以外で本を買ったことが無い。

この通いなれた本屋ビルの前で、龍一が足を止めた理由は、本屋の入り口から離れたビルの端に、小さな机に行灯と水晶玉を置いて椅子に腰掛けた老婆の姿があつたからだ。

小さな机の前には、A4サイズの紙で『占い、五千円』と書かれていた。

「占い師か……」

とても気に成る老婆であった。

矮躯の背を丸めて、ただじつと椅子に腰掛けている。

その顔は皺だらけで頭も白髪であった。

老婆の前を、幾人もの歩行者が過ぎていくが、誰もが老婆に視線すら向けずに無視していた。

龍一の足は、自然と老婆の方へと進んでいた。

「占いですか？」

老婆に声を掛ける龍一。

声を掛けてから自分でも驚いた。

どちらかといえば人見知りで内気な自分が、進んで見ず知らずの人には声を掛けるとは。

上から見下すような龍一を老婆がゆっくりとした動きで見上げた。

細い目から僅かに黒目が見える。

「お客様じゃあないよねえ」

老婆が言った。

龍一は、思わず「うん」と一言返す。

密では無い。

1500円しか持っていない。

5000円は、円の小遣いに匹敵する金額だ。

幾らオカルト好きでも、占いなんかに一円分の小遣いは出せない。

では、何故、自分は、この老婆の前に立つて、声まで掛けてしまつたのだろうと疑問に思つた。

その疑問に自分で回答を出すよりも早く、老婆が話しを続けて来る。

老婆の声は、乾いているが穏やかで優しかつた。

「じゃあ、欲しいのかい？」

「欲しい？」

「違うのかい？」

何かくれると言つだらうか。龍一は、僅かに首を傾げた。

「貴方は、超能力が欲しいのでしょうか？」

「えつ？」

はつとする龍一。

唐突な言葉だった。

超能力とは、やはりあの超能力の事だらう。

サイコキネシスとか、テレパシーとか、テレポーテーションとかだらう。

何故に占い師の老婆が、唐突にそのような事を言い出したのか理解が出来なかつた。

だが、龍一の心にイカヅチが落ちたような衝撃が走る。

超能力とは、オカルト好きの龍一が欲して成らない夢の能力であつた。

家の勉強机の上で、何度鉛筆を手で振れずに動かそうと念じた事か。

授業中、隣の列の四つ前に座る女子生徒に、振り向いてくれとテレビを送つた事か。

放課後、女子新体操部の更衣室を遠目に、分厚いコンクリート壁を透視しようとした試みた事か。

だが、凡人の中の凡人である龍一には、そのような超能力が備わっていた訳でもなく、幾ら好きでオカルト本を読み漁つたとしても、備わる訳でもなく、ただ悔しい涙を飲み続けてきた。

欲しい。

龍一は、年中欲しいと懇願していた。

それを。

それを、この老婆が見破ったのである。

一瞬、龍一の脳裏に占い師とは恐ろしげ心眼を会得しているのかと、脅威にも似た尊敬の念を抱かせた。

「超能力、要らないの？」

「要ります……」

老婆の言葉に龍一は、ポロリと本音を返してしまつ。

「じゃあ、あげてもいいわよ

「えつー!？」

心臓が止まりそうな程に仰天した。

だが、同時に警戒心も高まる。詐欺かと疑う。

「差し上げてもいいけど、どんな超能力が貴方に備わるか、私にも分らないわよ」

頭が混乱する龍一。

とても疑わしい話だが、超能力が欲しいのは、子供の頃からの夢である。

怪しいが、この場を離れられない。

「お金は、持つていませんよ……」

ついつい口に出た言葉であつたが、老婆は皺だらけの顔を微笑まして「お金は要らないよ」と言った。

「じゃあ、何か他の物を要求するとか、何か条件でもあるのですか？」

「別に何も要求はしないわよ。じつて言つなら、『恋』かしらねえ

」

老婆は言いながら頬を赤らめ横を向く。

ちゅつとキモイ。

「でも、条件はあるわよ」

視線を龍一に戻した老婆が言った。

やはり何かあるようだ。再び警戒を強める。

「私は誰かに超能力を上げられるけど、どんな能力が目覚めるかは指定できないの」

「選べない？ サイコキネシスとかテレパシーとか、どんな能力が備わるか分らないと」

「難しい事は分らないわ。でも、様々な個性的な能力が生まれるわ。私の超能力は、他人の心にある未知の扉を開く能力なの。だから、上げると言うより、鍵を開けるような感じかしら」

「この人も超能力者なのかと龍一は驚いた。

「鍵を開く……。人間のブラックボックスを開くように……」

「呴くように言った龍一の言葉に老婆が反応する。

「そうそう、昔の事だけど、私が超能力をあげた人が、私の能力を『パンドラキー』とかと呼んでいたかしら」

「パンドラキー。」

「パンドラの箱を開ける鍵を意味する能力なのだろう。」

「心のブラックボックスを開けて、超能力者として目覚めさせる能力。」

「この老婆は、今まで何人の超能力者を生み出してきたと言うのだ

ろうか。

だが、凡人の中の凡人である龍一には、そのような超能力が備わっていた訳でもなく、幾ら好きでオカルト本を読み漁つたとしても、備わる訳でもなく、ただ悔しい涙を飲み続けてきた。

欲しい。

龍一は、年中欲しいと懇願していた。

それを。

それを、この老婆が見破ったのである。

一瞬、龍一の脳裏に占い師とは恐ろしい心眼を会得しているのかどうか威にも似た尊敬の念を抱かせた。

「超能力、要らないの？」

「要ります……」

老婆の言葉に龍一は、ポロリと本音を返してしまつ。

「じゃあ、あげてもいいわよ」

「えつ！？」

心臓が止まりそつた程に仰天した。

だが、同時に警戒心も高まる。詐欺かと疑う。

「差し上げてもいいけど、どんな超能力が貴方に備わるか、私にも分らないわよ」

頭が混乱する龍一。

とても疑わしい話だが、超能力が欲しいのは、子供の頃からの夢である。

怪しいが、この場を離れられない。

「お金は、持つていませんよ……」

つこつとい口に出た言葉であったが、老婆は皺だらけの顔を微笑まして「お金は要らないよ」と言った。

「じゃあ、何か他の物を要求するとか、何か条件でもあるのですか？」

「別に何も要求はしないわよ。じつて言つなら、『恋』かしりねえ」

老婆は言つながら頬を赤らめ横を向く。

ちよつとキモイ。

「でも、条件はあるわよ

視線を龍一に戻した老婆が言った。

やはり何があるよつた。再び警戒を強める。

「私は誰かに超能力を上げられるけど、どんな能力が目覚めるかは指定できないの」

「選べない？ サイコキネシスとかテレパシーとか、どんな能力が備わるか分らないと」

「難しい事は分んないわ。でも、様々な個性的な能力が生まれるわ。私の超能力は、他人の心にある未知の扉を開く能力なの。だから、上げると言つより、鍵を開けるような感じかしら」

「この人も超能力者なのかと龍一は驚いた。

「鍵を開く……。人間のブラックボックスを開くよつこ……」

「呴くよつた龍一の言葉に老婆が反応する。

「そうそう、昔の事だけど、私が超能力をあげた人が、私の能力を『パンドラキー』とかと呼んでいたかしら」

「パンドラキー。

パンドラの箱を開ける鍵を意味する能力なのだろう。

心のブラックボックスを開けて、超能力者として目覚めさせる能力。

この老婆は、今まで何人の超能力者を生み出してきたと言つのだろうか。

「まだ、条件はあるわよ」

「ほかにも?」

この時点で龍一の警戒心は、好奇心に飲まれていた。

条件と言つのが、超能力を貰つ為の代償でなく、貰つた後の事を話しているからであつた。

棚から牡丹餅状態の話に、目が輝き始めている。

「超能力を得た人は、仲間内では異能者と呼び合つわ」

超能力者が他にも沢山居るよつうに言つよつた。

更に老婆は話し続ける。

「異能者になると、一つだけ性格が変わるものよ」

「性格が変わるのですか?」

それは何だか嫌だと思つ。

「一つ曰は、異能者は、異能者同士でしか恋愛関係に発展できなくなるのよ」

「異能者は、異能者しか愛せない?」

「やうなのよ……」

そう言い老婆は俯き加減で溜息をついた。

恋愛話ならば、龍一には関係がない。

恋人も居ないし、今後出来る気配もない。

17歳にして半ば諦めムードである。

龍一は、一つ目の性格変化を何気なく無視した。

「一いつ日は？」

「一いつ日はね、新しい趣味のよつなものにも田覓めちやうのよ」

「新しい趣味ですか……」

何を言いたいのか分らない。

「そう、今まで好きでもなんでもなかつたものが、急に大好きになつちゃうの」

「なるほど。本当に新しい趣味が芽生えてしまつのですね」

「そうそう、急に服のセンスが変わつたり、味覚が変化したりするの。酷い人は、ウンコが大好きに成つたとか、そんな例もあるわ」

「ちょっと待つて下さいー ウンコが好きになるつて問題でしょー！」

服のセンスが変わるぐらいは良いが、ウンコが好きになるは、文化

人としてダメダメだらうと声を荒立てる。

「聞いた話だと、ウンコの写真を取りまくつてこむらういわよ」

「しゃ、写真ですか……」

味覚が変わるの後にウンコの話がでたので、食するのかと勘違いしていた龍一は、誤解があつたのだと分かり僅かに安堵した。

「この二つの条件が飲めるのならば、貴方を異能者にしてあげるわよ」

「無料で？」

「ええ、タダでよ」

腕を組みながら龍一は、親指と人差し指で自分の顎を摘まんで考えた。

超能力は、とても欲しい。

子供の頃から懇願して止まなかつた夢だ。

しかし、ペナルティーが怖い。

どのような超能力を獲得できるか分らないのに、変態的趣味が備わるのも考え方だ。

素晴らしい超能力を得られるならば、多少の変態趣味に目覚めても我慢できよ。

だが、なんの役にもたたないゴミのような能力を授かっただえに、ウンコを愛でるような趣味を好むようになった、それこそ人生の終末を遂げてしまつ。

實に恼ましい。

この天秤のバランスは、博打の要素が強い。

龍一は、喉を唸らせ悩みに悩んだが、やはり結論は一つだった。

それでも超能力が欲しい。

龍一の覚悟が決まる。

少年が老婆に向つて深々と頭を下げた。

「僕に、超能力を下さい。僕を異能者にしてください！」

礼儀を正した隆一に白髪の老婆が微笑む。

「後悔しないわね？」

「はいー。」

頭を下げたまま大きく返事を返す。

その頭に老婆が皺だらけの細い両腕を伸ばす。

軽く両手を頭に乗せた。

「じゃあ、貴方は今から私たちの仲間よ。今日から異能者よ

龍一の頭の中で、何かカチッと音がした。

鼓膜から伝わって来た音でない。

心の中で鳴った音のようだった。

それと同時に、脳内が白く染まる。

視界も白く染まつた。

すべてが純白に染まる。

まるで白紙のキャンバスのようだった。

そこに何かが現れた。

遠くから何かが飛んで来る。

クネクネと長い体を伸らせて飛んで来る。

蛇じゃない。

龍だ。

ドリーンだ。

「これが、僕の超能力か……」

飛んで来る飛龍は、短い両腕に何かを抱えていた。

よく見れば、ドリゴンの表情は歡喜に溢れていた。

田を凝らす少年。

その上空をドリゴンが渦を巻くように飛び回ると、抱えた何かをばら撒いた。

何かがフワフワと沢山落ちて来る。

「ハ、これは！？」

白、黒、赤、ピンクに水色。

それは、色取り取りのパンツ。

乙女の羽衣。

女性物の下着だった。

龍一は、綿雪のように降り注いでくる女性用の下着の中、ヨン様もビックリなほどの笑みで、両腕を広げながら微笑んでいた。

「パ、パンツだお～～」

言葉の詰尾に、ハートマークが咲いている。

こうして少年の新しい変態物語が始まった。

変態異能者物語のスタートである。

## ドリゴンとパンツの謎

頭の中の霧が、晴れて行く。

耳に町の雑音が蘇りだした。

田の前には、あの婆さんが居た。

椅子に腰掛けたまま呆け眼の龍一を、満面の笑みで見上げていた。

「い、いまのは……」

純白の空間に現れたドリゴン。

そして、パンツの雨。

この婆さんが、本当に超能力をプレゼントしてくれたのならば、あれは幻覚でないだろ？

自分で見たのだ。確信できる。

ドリゴンとパンツ。おそらくあれは、龍一が授かった超能力と、新たな趣味の片鱗。

ドリゴンはカツコ良かつた。

しかし降り注ぐ沢山のパンツは……。

それを思い出した龍一の顔が、不安に濁る。

「どうかしら？」

龍一を見上げる老婆が言った。

自分の両掌を眺める龍一だが、何か変化があったよつこは感じられなかつた。

「超能力が、本当に授かつたのでしょうか？」

「わうじやなくて」

首を傾げる龍一。

「な、何がですか？」

「私を見て、トキメキを感じないかしら？」

「ときめき……ですか……？」

苦笑いと共に訊き直す。

そんなもの、微々たりとも感じる訳がない。

しかし老婆は、何かを期待するような眼差しで龍一を見上げていた。

「わう、トキメキよ。私を見て、キュンと来ない？」

「あませんが……」

龍一が素直に答えると、老婆の顔がどんよりと曇りだす。

肩から力が削げ落ち落胆に沈む様子がよく分つた。

「またハズレなのね。今度こそ上手く行けばと思つたのに……」

そう呟きながら椅子から立ち上がる老婆は、そそくさと後片付けを始めた。

椅子から立つても、座っている時と背丈が変わらない。かなり矮躬のようだ。

椅子や机を折りたたみ水晶や行灯を鞄の中に仕舞いだした。

「どうしたんですか……」

「今日はもうおしまい。疲れたから帰るのよ」

後片付けを終えた老婆は、荷物を背負つと駅の方に歩き出した。

龍一は、とまどと悲く老婆の後姿を見送る。

老婆も疲れたと言つて いたが、何故か龍一も疲労感を強く感じてい  
た。

体全身が重いし、頭にまだ靄が掛かっている気分が続いていた。

ガラス越しに本屋の店内を覗きこむ。

三日月堂の店長が、本棚の整理をしているのが見えた。

「今日せやむにねりか……」

立ち読みが目的で二日丹堂に立ち寄る積りだったが、ここまで来て  
気分が乗らない。

龍一は、踵を返して駅を越える為の跨線橋を手指す。

帰宅の路に着くまでの道中、龍一はずつと考えていた。

自分が得た超能力とは、一体なんだろう。

老婆曰く、どのよつた能力に目覚めるかは分らないとの事だった。

サイコキネシスやテレキネスのよつた、オカルトでもポピラーなものだろうか。

それとも厨二ぽい個性的な能力だろうか。

スタンダードやミュータントのよつた。

もしかしたら車輪眼とかギアスとかは……ないだろう。

それに強い弱い、使える使えないも大きな問題だ。

せつかく得た超能力でも、えつぴつを転がす程度のサイコキネシスや、長年連れ添つた夫婦が「あれ取つてくれ」「お醤油ですね」みたいなテレキネスではガッカリにも程がある。

だが希望は、白昼夢で見たドラゴンだろう。

きっと自分に目覚めた超能力は、ドラゴンに関係した能力だろう。

しかし一方で不安なのは、降り注いできたパンツである。新しい趣味が、同時に不安を扇いだ。

「パンツか……」

呟きながら視線が、近くを歩く女性に向けられた。

どこかの会社員であろうか。二十歳ぐらいの女性が、スースに短いスカートを履いて龍一の前方を歩いていた。

自然と龍一の視線が、女性の下半身に落ちて行く。

スカートから伸びる美脚が綺麗だつた。ヒップも形が良い。

いつたい彼女は、どのようなパンツを履いているのだろうか。

やはり大人っぽいレースのパンツだろうか。

白だろうか、黒だろうか、それとも情熱の赤だろうか？

ノーパンなんて有り得ないだろうが、そんな変態だつたらガッカリするな。

パンツは文化人の嗜みとして履くべき代物だと思つ。

龍一は、そのような妄想を巡らせながら真っ直ぐに歩く。

女性は龍一が向つ道とは別の方へと曲がつていた。

何故か名残惜しさを感じる。

今度は前方から自転車に乗った他の女子生徒が走つて来る。

短いスカートが、風に靡いて際どく揺れていた。

見えるか！

心で叫んだ龍一の姿勢が若干沈む。

さりげなく、出来るだけさりげなく、好奇心のままに行動する。

「ちつ、残念……」

見えなかつた。

龍一とて年頃の高校生だ。異性に興味を抱く。

しかしここまで異性のパンツが気に成る事はなかつた。

まだ龍一は、自分の中に芽生えた新たなる興味に気付いていない。

住宅街に入った隆一の周りから人気が途絶える。

静かな住宅街では殆ど人とはすれ違わなかつた為、再び超能力に付いてみて考へ始めた。

一つ一つ自分が知りうる超能力のタイプを、潰して行くように試してみるしかないだろう。

それで自分の超能力が何かが解るかもしない。

自室に帰れば様々な超能力を記載した本が幾らでもある。

結局あれこれ悩んだ結果、自宅に到着するまでには何も回答が出なかつた。

「まあ、あせる事はないよな 」

そう言いながら龍一が玄関のノブを捻ろうとした瞬間、唐突にカシヤとカメラのシャッターを押したような音が聴こえた。

「ん？」

後ろを振り返る龍一。

誰も居ない。

なんだらうと思いつ周囲を見ますが、これといつて不審などこりは見当たらない。

静かな住宅街。辺りの色が、夕焼けの為、オレンジ色に染まりかけていた。

いつもと変わらない近所が見えるだけで、歩いている人すら見当たらなかつた。

「空耳かな 」

（氣のせいだらうと、そう思つた。）

扉を開いて「ただいま」と声を張ると、キッチンの方から若い声で母が「おかえり」と明るく返して来た。

そのまま階段を駆け上った龍一は、自室で制服から私服に着替えると、『わいしりと詰まつた本棚の前に立つ。

「え～と、 Irene と Irene と……」

数冊の本を手に取ると、ベットに寝そべつた。

どれもこれも幾度と読み返した超能力研究者の本である。

超能力を科学の目線から集録した本だ。

「参考になるだろ？」「

龍一は、夕食までの時間を、結局読書に費やした。

窓の外は、もう暗く成っていた。

時計の針は、七時を刺していく。

一十分ぐらう前に姉も帰ってきた様子だつた。

そろそろ父も帰宅する時間だらう。

「 もう、 10 分な時間か 」

もうじき夕食だらうと部屋を出て一階へと降りていぐ。

結局、自分の超能力が何かは解らなかつた。

## 冷たい姉と奇跡の母

龍一が部屋を出た直後、階段を駆け上がって来るよつこ、一階からスパイシーを良い香りが鼻に届く。

「今日はカレーライスか～」

龍一の母が作るカレーは実に美味しい。

スーパーなどで市販されている出来合いの固形ルーを使わずに、幾つものスパイスを混ぜ合わせて本格的なカレーを作るのだ。作り方は、料理本で習つたものに、更なるアレンジを加えたオリジナルの一品らしい。

龍一の母は、基本的に何を料理しても美味く作る。

結婚する前の夢が、料理師に成る事だったらしい。

「かーさん、ご飯まだあ～」

階段を駆け下りた龍一が、そう言いながらリビングに入ると、テレビの前のソファーアには、雑誌を片手に持つた姉の虎子が座っていた。

龍一がリビングに入つて来ても顔すら上げない。

GパンにTシャツ。黒髪を腰まで伸ばしている。

家に居るとは随分とラフな格好をして居るが、出社時は堅苦しいレ

ディーススーツに身を固めたガチガチの公務員だ。

短大を卒業後、市役所に勤めている。

性格はかなりキツイ。

「龍一くん。お父さんがまだだから、先にお風呂に入ってきたなさい」

台所に立っていた母が振り返ると我が子に微笑みながら言った。  
地味な服装にエプロン姿の母は、今年で39歳である。

19歳の時に姉の虎子を出産した。今の姉と同じ年にだ。その一年後に龍一を儲けた。

しかし一児の母とは思えないほどに容姿は若々しい。

見た目には、20代後半にしか見えない。

近所の人には、奇跡の39歳と呼ばれているが、性格はおつとりで、時折じれったくもなる天然キャラだ。

母のつかさと姉の虎子は、歳にして20歳近くも離れているが、並んで歩けば姉妹にしか見えないのだ。

美形なのが化粧が上手いのかは龍一に判断できないが、顔もスタイルも綺麗で良く似ている。

だが、性格だけは似ても似つかない。

「ねーちゃんは、風呂入ったの？」

「入った」

ファッショング雑誌を読む姉が、素っ気無く答える。  
龍一は、なんだかしらけ気分でリビングを出た。

姉との会話は、ここ最近いつもこんな感じである。

昔は弟思いで龍一を可愛がり過ぎて苛めに成るぐらい構ってくれていたのに、いつの間にか冷め切った兄弟関係に成ってしまっている。

龍一は、バスルームの脱衣所で衣類を脱ぎながら、洗面所の鏡で顔や背中を確認するように眺めた。

「これといって変化は無いか……」

肉体の変化。

まさかと思うが念の為である。

アメリカのミュータントみたいに、容姿が変貌しては堪らない。

超能力者に幼い頃から憧れていたが、モンスターには成りたくない。  
しかし鏡で見るからには、それは無いようだった。

全裸になつて今一度全身を見回し確認する。

「異変は無いな……」

安堵した龍一は、洗濯機に手を掛けて足の裏も確認する。

確認が終わってから龍一は、自分がここまで心配性だったかと苦笑う。

ちょっと過敏に成りすぎていると反省した。

「それにしても俺の超能力って……。とりあえず風呂に漬かりながら考えるか

そう呟いた龍一の視線が、手を掛けていた洗濯機の中に落ちた。

「ん……」

龍一の視線の先には、先に風呂に入った姉の物だろうか、それとも母の物だろうか、どちらの物か判らなかつたが、女性物も下着が入つていた。

白いパンツである。

「……」

静かに固まる龍一。

洗濯機の中の下着を凝視する。

不思議なぐらい冷静だった。

まるで花瓶に活けられた花を観賞しているような気分である。

頭の中から先程まで考えていた超能力の悩みが消え去っていた。

代わりに到来した思考は、止まらない程の好奇心であった。

「うむむ……」

自然と龍一の手は、洗濯機の中へと伸びていた。

温もりを失った白いパンツ。それをしっかりと掴んで拾い出す。

「使用後だよな……」

洗濯機の中に入っていたのだからそりだつ。

「これは……、この感情はなんだらう……」

自分でも戸惑いを感じていたが、好奇心がそれを上回る。動きは止まらない。

洗濯機の中から取り出した白いパンツを両手で持つと、眼前で広げる。

これが、いけない事だとは理解できていた。

これが、母か姉の物だとも解っていた。

これが、変態行為だとも……。

「へ、変態行為……」

その言葉を思い描いた瞬間、老婆の言葉を思い出す。

超能力と共に芽生えるもう一つの感情。新たなる趣味。

今何が自分に起きているかが理解できた。

自分に芽生えた新たなる趣味は、おそらくこれだらう。

思い当たる節もある。

今日の帰り道。女性とすれ違う度に、下着の事を考えていた。

間違いないだらう。

だからこそ、目が放せなかつた。

パンツから

刹那、扉が開く。

「龍一。シャンプー切れてたから新しいの持ってきてやつたわよ

姉の虎子である。

新しいシャンプーを持つた姉と、パンツを持った弟の視線が合ひつ。

しかも、龍一は全裸であった。

硬直する一人。

空気も凍り付いていた。

「あ……、あんた……」

龍一の視線が、姉からパンツに戻る。

更に、自分が全裸であることも肉眼で股間を見て確認した。

「ねーちゃん、これには深いわけが……」

言い訳のしようがなかつたが、やつぱり言い訳がしたい。

「それ……、私の……下着……」

「わざとじやないんだ……」

当然ながら龍一の言い訳は、姉の耳に届かなかつた。

姉の虎子が、弟の為に持つて来た新しいシャンプーを床に落とす。ゴトーンと音が床で鳴る。

一方、弟の龍一は、新しく芽生えた趣味に力が籠もり姉のパンツを落としもしなかつた。

しつかりと持つている。

「おかーーーん！」

姉が叫びながら走り出した。

まずい！！

「違うんだ、ねーちゃん。話を聞いてくれ！」

龍一も走り出す。

全裸のままバスルームを飛び出して姉の後を追つて廊下を走った。

自分が全裸である事を、再び忘れている様子だった。

その時である。

「ただいまー」

玄関の扉が開いて父の源治が帰宅してきた。

「きやあああああああ、変態

「ねーちゃん、誤解だつてば——！」

「……」

玄関で硬直する父、源治。

家族の為に今日も厳しい労働にせいを出し、残業を終えて帰宅してみれば、全裸の息子が両手で白いパンツを持ったまま姉を追いかけている光景だった。

家庭崩壊。

源治の脳裏に、その言葉が過ぎると片手から鞄が落ちた。

娘の悲鳴が、まだリビングから聴こえて来る。

「終わつたな……」

政所家にはカレーの良い匂いだけが平和そうに広がっていた。

## 幼馴染はボーアッシュ（前編）

食卓に並ぶカレーライスとサラダの器を前にして龍一は、父の源治にじりじりと絞られていた。

姉は弟を変態変態変態と連呼しながら一階の自室にひっこんでしまい出て来ない。

こちらもかなり怒っていた。

姉の部屋に夕飯を運んだ母が、お盆を片手にリビングに戻つて来た。一通りの説教を怒鳴つた父が落ち着くまでに30分近くの時間が掛かった。

流石に龍一も凹んだ。

父の源治は、かなり硬派な性格だ。解り易く言えば、元ヤンである。

現在45歳。仕事は土木建築会社の事務職を務めているが、スーツを着た姿は身形を崩していないヤクザに見える程に凄みがある。

しかも右頬には、刃物で切られたような派手な古傷があるのだ。

尚更、堅気には見えない。

頬の古傷に関して父は訊いても語らないが、母曰く、父は若い頃から外見とは裏腹に真面目な性格だつたらしい。

喧嘩もしない、博打も打たない、お酒は飲むが飲まれない。まして

や弱い者苛めなんか有り得ないとの事らしい。

少なくとも母の田には、やう映つていたようだ。

だが、父の若い頃の知り合こと言う人が、たまに家へと尋ねてくるが、どの人も強面である。

しかも殆どのお客が、吉本芸人でもないのに父のことを「兄さん」と呼ぶのである。

その事から父の若かりし時代に、どれ程のやうな仕事を仕出かしていたかが推測できた。

間違いなく元ヤンキーである。

しかも、かなり格上のヤンキーだ。

だから父に怒られるのは、たまらなく怖い。

おやりく龍一は、一生父には逆らえないだろうと想えていた。

龍一にとつて父親は、身近に在りながら最大の壁なのだろう。

しょんぼりと氣を落とした龍一が食事を終えて白室に戻る。

階段を登る足が、とても重い。

まるで鉄球付きの足枷でも付けられた氣分だった。

「ああ～……、殺されるかと思った……」

咳きながらベットに倒れこむ龍一は、うつ伏せの体制で枕に顔を押し付けた。

まだ思考回路が恐怖でちじこまつっている。超能力について考える余裕が精神力として残つていなかつた。

「もう駄目だ……、今田はもう寝よう……」

寝巻きに着替えようと龍一がベットから起き上がつた時である。カーテンの閉められた窓が、外からノックされた。

「月美かな

龍一がカーテンを開けると、窓ガラスの向こうに見なれた人物が直ぐ側に居た。

月美とは、隣の家に住んでいる幼馴染の女の子だ。

月美の部屋は龍一の部屋の向えにある。家と家がかなり接近している為に、屋根を伝つて来れるのだ。

笑顔の月美が窓の外で手を振つていた。

髪はショートヘアに気の強そつな顔立ち。

白いTシャツに水色インクトップを合せている。

下はひらひらとしたミニスカートを履いていた。

胸のサイズはほどほどだがスタイルは悪くない。  
スレンダーで綺麗だと思う。

健康的な生脚が艶々していて魅力的だった。

歳は龍一と同じ年であるが、通つ高校は違う。彼女は隣町の女子高に通つている。

龍一が窓の鍵を開けると、彼女の方から窓を開けて室内に上がりこんで来た。

「いんばんは、龍一ちゃん」

笑顔で挨拶をする月美は、屋根の上を渡つてくる際に履いていたサンダルを脱いで窓の外に下ろした。

窓枠を間にくの字になつてサンダルを置く月美の仕草に龍一が、「よひ、月美」と挨拶しながら身を屈める。

パンツが見えそうで見えなかつた。

月美は龍一が気さくに話せる数少ない女子の一人である。

「月美、どうした?」

「どうしたのは龍一ちゃんの方でしょ?。虎ねーちゃんも叔父さんもかなり怒つてたじやない」

「いや、まあ……」

ゞもる龍一。バツの悪やつな顔をする。

おやりくは騒動と説教の大声が、隣の家まで届いていたのだ。ひつ。流石に恥ずかしい。

龍一がベットに腰を下ろすと月美は勉強机の椅子に腰掛けた。

「まあ、虎ね～ちゃんが怒るのも分るわよ。可愛い弟がさ、まさか脱衣所で自分の下着を観賞してれば幻滅の一しきみうつよね」

「そ、そこまで聞こえてたのか……」

更に肩を落とす。

椅子に座る月美は足を組むと、膝の上に肩肘を付いて顎を置いた。

それから少し怒った顔で言ひ。

「龍一ちゃん、なんで虎ね～ちゃんのパンツなんか手に取ったのよ？」

怒るよつに言ひ月美から俯いて顔を逸らす龍一は、大きな溜息を付いた。

父にも同じことを大声で問われたが、出来心としか答えを返せなかつた。

昨日までは、室内に母や姉の下着が乾してあっても気にすらなかつた。

それが、あの婆さんに出会つてからだ。急にパンツが気になりだしたのは。

今も足を組む月美のスカートの奥が氣に成つてゐる。

正直、月美は可愛い。

今田は珍しく女性ぽい服装だが、普段は髪型も服装もボーアッシュショーンを好む。

小さな頃は殆ど男の子に見えたが、高校に入学した頃から服装も徐々に女の子らしくなり、発育の遅れていたスタイルも女性らしく成つて來ていた。

ボーアッシュショーンからお姉さんキャラに生まれ変わつとしている節が見られた。

女子高でも一年の頃は王子様キャラで通つていたらしいが、最近は月美お姉さまと後輩からは慕われているそうな。

そのぐらい美形であることは間違いない。

「虎ね～ちゃんも、最近ますます美人に磨きが掛かってきてるけどさ。龍～ちゃん、流石に身内のパンツ見て興奮てのはねえ～。しかも洗濯機から取り出したところを見つかるとはねえ～」

そうだ、タイミングが悪かつたのだ。

いつも通り、姉の後、お風呂に入ろうとしたら、たまたま洗濯機に投げ込まれていた下着に目が落ち、思わず手に取つてしまい、そこ

を姉に見られてしまつた。

そうだ。

たまたまが偶然の如く重なり合い、悪いタイミングを積み重ねるようになみ出してしまつただけだ。

言い訳だが、己の口を正当化しなければ、死んでしまつそつな気分であった。

「反省している……？」

「してる……」

俯き、項垂れて、力無く答える龍一。

なんとも寂しそうな顔を見せる龍一を心配したのか月美が眉を顰めた。

そして、椅子に座りながら組んでいた脚を解いて、今度は両膝を合わせると上に両掌を乗せる。

恐縮した姿勢で月美が言った。

「そんなにパンツ……、見たい？」

「見たいと言いますか、なんと言いますか……？」

「ちよつとなら、私が見せてあげようか……？」

「えッ！」

田を見開きながら瞬時に頭を上げる龍一とは裏腹に、月美は顔を赤らめながらそっぽを向いた。

照れている！？

だが、それが可愛い！！

## 幼馴染はボーアッシュ (後編)

「な、何言つてるんだよ、月美……」

龍一の言葉が震えていた。

動搖している。

生唾を飲んで喉を鳴らした。

「だつてほら、私ばかり見ているのも悪いし……」

「……はあ？」

氣恥ずかしそうに訳の分らない言葉を返した月美は、天井の隅っこを見詰めながら赤面していた。

沈黙。

硬直した龍一が、月見の顔を凝視する。

一方の月美は、沈黙に時折負けたのか龍一をチラ見するが、直ぐに視線を天井の隅に戻すを繰り返していた。

二つの疑問。

ボーアッシュな幼馴染の乙女が、突然自分のパンツを見せてあげると言つのだ。

願つたりな申し出であるが、何故にそのような事を言い出したのか  
が分らない。

そして、その後に言った言葉。

自分が見ていても悪い。

言葉の真意が不明である。

だが、しかし！

「パンツが見たいです」

消え去りそうな小声だつたが、龍一の本意であつた。

「誰の……、誰のパンツが見たいのよ？」

未だ天井の隅を見る月美が、自分の名前を言わせようと振つてくる。

誘われているのか？

それともおちよくられているのか？

眠か！？

釣られるままで元美の名前を口に出しから、「嘘に決まつてゐじやない、龍～ちゃんキモイ。あはははははあはあ～ん」とか言われて馬鹿にされるのでは。

そのような疑いも想像できたが、すくすくと育つた健康美溢れ出る幼馴染の新鮮なパンツも凄く見たかった。

「ちよつと……、今こじで？」

とつあえず質問で探りを入れる。

月美は細い首で、一度だけ頷いた。

「マジですかあ～……」

思わず出た言葉に月美が「マジですか……」と小声で返してくれた。

月美は幼馴染だ。小さい頃に、幾度となくパンツを見たし、何度も一緒にお風呂にも入った。

そいつ言ひ仲だ。

だが、それは子供の頃の話。過去の思ひ出に等しいし、その頃の月美を龍一は、男の子と思つていた。

彼女を女の子だと意識するようになつてからは、裸どころかパンツすら見た事が無い。

そして、別に見たいとも思つていなかつた。

しかしながら今は、見たい。

力一杯、見たいのだ。

懇願している。

「これは賭けに出るべきだろ？」

例え賭けに負けても、ただ馬鹿にされるだけだ。

しかし賭けに勝てば、現役女子高生が身に付けたままの、生のおパンツ様を揉めるのだ。

勝負に出ない理由が無いだらう。

「龍一ちゃん、見る？」

龍一が打算的な思慮に励んでいると、月美が無垢に問う。

隙を突かれたような表情で龍一が、「うん」とハツキリとした抑揚で答えた。

視線を決して合わせようとしない月美。

視線を月美の顔から外そとしない龍一。

最近大人びて來たと感じていた幼馴染の表情が、随分と幼く見えた。

室内の温度が、少し上がったような気がした。

二人の顔が、一段と赤く熱る。

黙つたまま椅子から立ち上がった月美が、ベットに腰を下ろしてい

る龍一の前にゆっくりとした足取りで歩み寄った。

龍一の眼前で、月美のハニースカートが揺れていた。

細い体をモジモジさせていた。

控えめな膨らみを見せる胸の前で、両手の指を落ち着き無く絡ませていた。

月美の全身の肌が、桜色に染まっている。

「ちよつとだけなんだからね……」

構わない、ちよつとでいいから見たかった。

龍一の目が血走る。

期待に心が膨らみ、若さで別の場所も膨らむ。

しかし、モジモジタイムがじれったく続いた。

待ちきれなくなつた龍一が、幼馴染の表情を窺おうと上を向く。

一瞬だけ一人の視線が合つたが、素早く月美が視線を逸らす。

顔は真つ赤だつた。

とても龍一を騙そうとしている様子ではないし、演技とも思えなかつた。

それを察した龍一の期待が、更に膨らんだ。

麗じゃない。

確信できた。

ならば待とうと決心する龍一。

決心が付かないのは月美の方に見えた。

言つたはいいが、なかなかパンツを見せようと動けない様子だった。

だが、その恥じらいが甘美なまでの蕩けるような空気を漂わせる。

黙り込む一人。

静かな部屋に、時計の秒針が刻む音だけが聴こえて来る。

下唇を噛む月美。

龍一が幼馴染の顔を見つめていると、月美の両手がついにゅっくりと動き出した。

その動きに龍一の視線が下に戻る。

待つていましたと心が躍る。

月美が両手の細指で、自分のニースカートの裾を摘んだ。

龍一の鼻息が荒くなり、時計の微音を搔き消す。

心臓の弾む音が、直接鼓膜に届いて邪魔くさい。

「と、特別なんだからね……」

言葉と共に月美のミニスカートが、少しづつ上昇していく。

綺麗な生足が、少しづつ見える量を増やしていく。

秘密の花園を隠すカーテンが徐々に幕を上げる。

目が放せない。

逸らせない。

瞬きすら忘れてしまう。

龍一の双眸が、異常なほど赤くなっていた。鼻血も出でている。

刹那。

「おおつー！」

見えた。

少し見えた。

よく判らないが、僅かに見えた。

更に露出は増えていく。

白一

否。

青い横しま！

シマパン！

ナイス、ボーアイツシユ！

全部ではないが、間違いなく見えた。

「いいまでー」

静かだつた部屋に張りのある月美の声が響くと同時にミニスカートの裾が下ろされた。

「もうちょっとー。」

いきなりボリュームを上げた月美の声に釣られて龍一も大きな声を上げてしまった。

「だーめー！」

そう言って、あつかんべーと舌を出した月美が、踵を返して入って来た窓へと動く。

ベットから腰を浮かせた龍一が、片手を伸ばすが届かない。

敏捷に窓の外へ出た月美が、上半身だけを反して手を振った。

いつものように微笑んでいた

明るく。

元気良く。

そして、優しく。

「おやすみ、龍一ちゃん」

その言葉を最後に月美は、自分の部屋に窓から入りカーテンを閉めてしまった。

その間一度も月美は、振り返らなかつた。

おやすみの言葉すか返せなかつた龍一は、ただ呆けながら幼馴染が消えた部屋の明かりを眺めていた。

その光も直ぐに消える。

龍一の部屋に、静けさだけが残つた。

「俺も寝よつかな……」

そう言い部屋の電気を消すと、ベットに潜り込む。

幼馴染がプレゼントしてくれた青春の記憶が、龍一の脳裏に鮮明に焼きついていた。

ベットの中で瞼を閉じても消える事無く浮かんで来る。

今晚の宝だ。

良い夢が見れそうだった。

「久々に、自家発電しようかな……」

こうして少年が歩む、新たなる人生の一日目が終了した。

早朝。

龍一が両親と朝食を取っていると、一階から早足で降りて来た姉の虎子が、何も言わずにリビングを横切り玄関に向づ。

母がおはようの挨拶を掛けたが姉はそれすら無視して家を出て行った

今日は平日だしスーツを着ていたから、出社したのだらう。

姉の様子からして、まだ昨日の事を怒っているようだつた。

当然だ。一日で忘れるのが無理がある。

食事を終えた父が席を立つと、ネクタイを締めながら息子に言つた。

「龍一、虎子が帰つたら、もう一度謝つておけ」

ドスの効いた声は、まるで脅しのような響きがあつた。

食事の箸を止めた龍一が、俯き加減で「うん……」と答える。

父に言われるまでもなかつた。龍一も朝一で姉に再度謝る積りだつた。

だが姉の虎子は、避けるように家を出て行つたのである。

龍一の心は、罪悪感をチクチクと感じていた。

やがて強面の父も会社に出社する為に玄関を出て行く。  
それを母が家の外まで見送った。

父と母は仲が良い。

結婚して20年が過ぎたが、新婚気取りで腕を組み寄り添っているシーンをちょくちょく見る。

近所でも評判なぐらいだ。

まさに美女と野獸と言つか、美女と極道である。

龍一も食事を終えて席を立つ。

そろそろ学校に行く時間だ。一度一階の自室に戻つて鞄を取つてから玄関を目指した。

龍一が玄関で靴を履いていると母がいつもより弁当箱を持ってきた。

「はい、お弁当」

「ありがとうございます、かーさん」

龍一が受け取った弁当箱を鞄に入れていると、更に母が何かを差し出す。

「龍一ちゃん、これで我慢してね……」

いつも微笑みを欠かない母の顔が、眉毛だけをハの字に歪めていた。

母が差し出した物に龍一が視線を落とすと、それは一一つ折りにされたレースのハンカチだった。

三角形に折られたレースのハンカチは、まるで女性物の下着にも見えた。

「か、かーさん……」

龍一が、こまつたような顔で母を見る。だが手は一一つ折りのハンカチに伸びていた。ガツシリと驚掴む。

「かーさん……、ありがと「ひー。」

龍一の眼に涙が滲む。

母のつかさは優しく微笑んでいた。

まさに女神である。

流石は奇跡の39歳である。

三角に折られたレースのハンカチをポケットに捻じ込んだ龍一は、「かーさん、これを励みに今日も頑張るよー」と心の中で感謝しながら家を出て行く。

憂鬱だつた龍一の心が、大分癒された想いだつた。

「おはよー、龍一ちゃん」

玄関を出ると、家の前で月美が立つていた。明るい挨拶が飛んで来る。

龍一が幼馴染に「おはよー、月美！」と挨拶を返すと一人は、駅の方へと並んで歩き出す。

朝、学校に登校する際に二人は、いつも駅前まで一緒に向つ。

そこから月美は電車に乗つて隣町に在る女子高に向かい、龍一は入れ替わりで電車から降りて来る親友の卓巳と会流して、一緒に歩いて学校へと向うのである。

幼馴染と並んで登校。

通う学校は別々に成つてしまつたが、この生活習慣は幼稚園の頃から変わつてない。

龍一が、隣を歩く月美をチラリと見た。

ボーリッシュな幼馴染は、健康的にスレンダーなスタイルで、女子高の可憐な制服を見事に着こなしていた。

短いスカートが揺れるたびに昨日の晩の事を思い出す。

龍一がシマパンの事を思い出してにやついて居ると、いきなり月美が「ね、龍一ちゃん」と話しかけて来た。

ドキリとした龍一が、必死に真顔を作つてから「なに？」と返す。

「流石は叔母さん。凄く龍一ちゃんの気持ちを理解しているわね」「

「なにが？」

龍一が不思議そうに問うと、月美が龍一のポケットを「これよこれ」と言いながら突ついた。そこにはレースのハンカチが入っている。

「見てたのかよー？」

「玄関の隙間から見えたよー」

月美が揶揄する田付きで言ひ。

戸惑いながらも龍一は、玄関が開いていたのだろうかと疑問に思つたが、見られていたことには変わらないと肩を落とす。

また月美に恥ずかしいとこ見られてしまつたと情けなく成り憮然と沈む。

「龍一ちゃん、そんなにパンツが好きなの？」

「好きと言ひますか……、なんと言ひますか……」

「恥ずかしさに小さくなる龍一に対しても月美が、何故か勝ち誇つた口調で言ひ。

「まあ、龍一ちゃんも、年頃の男だしね。わざわざのり興味を抱いても仕方ないか~」

「うぬせ~よ……」

龍一が、不真腐れるよつて口を尖らせる。

それが月美には可愛く見えたのか、今までと違つ慶しげ表情に変わつた。

「じゃあ~わ~、また今度、私が見せてあげようか~。」

「マジ~?」

龍一が素早い動きで幼馴染の顔を見ると、月美は逆の方を向いて表情を隠してしまつ。

しかし、ショートヘアーから覗く小さな耳が、真つ赤になつていた。

「た、たまにだつたら……、いこよ」

「マジですか~?」

「マ、マジですかよ……」

完璧に照れている。

だが、可愛い~!

心の中で「よし~」と言ひながら龍一は両手で小さなガツツポーズ

を取つっていた。

「その代わり、虎ね～ちゃんのパンツなんか、もう取つちや駄目なんだからね……」「

そつぽを向いたままの月美の言葉は、なんとなく交換条件にも聞こえたが、そんなの龍一には関係なかった。

なんの問題もなく女の子のパンツが挿めるのだ。歓喜な話である。

「わ、わかったよ、月美。もう虎ね～ちゃんのパンツには、手を出さない……」

龍一が常識的な事を誓つ。

「見るのも駄目なんだからね」

「わかつたよ、見ない……」

月美が上目使いで龍一を見ながら囁く。

「例え脱衣所に落ちてても、見ちや駄目なんだよ」

「うふ……、絶対に見ない

少し考えてから答える龍一。

「洗濯場に乾してあっても見ちや駄目なんだぞ」

「思わず田に入った……、とかも駄目?」

「駄目ー。」

円美の目が怒っている。

釘を刺さず円美の声色には、嫉妬の色が窺えた。

「じゃあ……、どうしてもパンツが見たくなつたら……？」

「幼馴染なんだから私に言ひなさいよー。ちょっとだけなら見せてあげるって言つてるでしょ！ 龍ヶちゃんが見ていいパンツは、私のパンツだけなのー！」

「円美、そんなに怒るなよ……。」

「」もで興奮して怒る円美も珍しい。

でも、怒る姿も可愛かった。

「じゃあ、円美」

「なによー。」

円美は少し冷静になつてから返事を返した。

「今、ちょっとでいいから、」もでパンツを見せてよー。」

「ー？」

立ち止まる円美。

龍一のお願いに月美の顔が、下から上へと一瞬で赤くなつて行く。

目が点と成り、頭のてっぺんから湯気を上げて固まつていた。

「駄目か、月美、パンツーーー？」

力を込めて訊く龍一。

戸惑う月美。

小動物のような眼差しで懇願する幼馴染の前で月美は、「ち、ちよ  
つと、なに急に言つてるのよ。」こは外なにさ。ちょっとだけなら  
パンツぐらい見せてあげるけど、外は駄目よ。だつて他の人に見ら  
れるし、幾らなんでもそれは恥ずかしいし。龍一ちゃんにパンツ見  
せるのだつて本当は凄く恥ずかしいんだからね。それを、こんなと  
ころでパンツを見せらだなんてさ。駄目つて訳じやないけれど、急  
すぎて心の準備が付かないよ。私だつて女の子なんだよ。龍一ちゃん  
にパンツぐらい見られるのは我慢できるけど、他の人にパンツを  
見られるのは絶対に駄目なんだから。そもそも龍一ちゃんは、パン  
ツを見せるのがどれだけ恥ずかしいか分つてるの。私はパンツぐら  
いって言つてるけど、真に受けないでよね。本当はすつごく恥ずか  
しこだからね！」と、キンキンと声をあげながら、あたふたと両手  
をバタつかせていた。

照れる月美の様子も可愛くいつまでも眺めていたい。

しかし、パンツも見たい。

その為か、ついつい急かす言葉を龍一が言つてしまつた。

「月美、お願い、パンツを、パンツを見せてくれ！」

一層力が入つていて。

声も大きくなつていて。

拝み倒すように頭を下げる龍一の眼前で、月美が赤面の色を更に濃くしてうろたえる。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよつと龍一ちゃん！？」

「頼む月美、パンツを、パンツ、を、見せてくれ！？」

畳み込むように訊く龍一も必死だつた。

月美が首を振つて辺りを見回せば、数人の歩行者が一人を見ていた。

いつの間にか二人は、駅に近い大通りまで出ていたのだ。

歩行者達の視線が月美に突き刺さる。

好奇心の眼差し、失笑を堪える眼差し、軽蔑の眼差し、様々な視線に月美が気付いた。

離れた場所から「こそ」と話す他高の女子生徒が、「あのカップル、朝からパンツパンツって馬鹿じゃないの」と話す声が微かに届く。

プルプルと震えだす月美。

「りゅ、龍～ちゃんの馬鹿……！」

叫んだ月美が、摔倒ながら頭を下げる龍一の後頭部に平手を落としてバシンと叩いた。

そして大声で、「わああああああ」と泣きながら物凄いスピードで走り出す。

あつといつ間に月美の姿は駅の方へと消えて行つた。

一人残された龍一も、頭を上げてから辺りの様子に気が付いて赤面した。

逃げるようその場を後にする。

龍一が駅前に到着すると、いつものように待ち合わせをしている卓巳が駆け寄つて来た。

「おい、龍～……」

「お、おはよう、卓巳」

卓巳の表情は、険しかつた。

「おはようじやあねえ～よ、龍～。さつき大声上げながら月美ちゃんが走つていたぞ……。何か有つたのか？」

「いや、ちょっとした喧嘩みたいなもんだよ……」

「喧嘩……、大丈夫か？」

「大丈夫だと思つ。悪いのはほきつと俺だ。夜にでも円美に謝るよ…」

「…」

長身の親友は、金髪の髪を搔きながら心配そつた表情で言つ。

「やつした方がいいぞ、龍。お前は女にモテない甲斐性無しだからよ、円美ちゃんに愛想を尽かされたら一生結婚すら出来ない童貞野郎で終わつてしまつぞ。だから絶対に謝れよ、絶対だぞ」

念には念を押された。

「親友とは言え、凄い言ひようだな。……まあ、当つているよつたもんだが……」

「それはそうと、龍。何していたんだよ、いつもの時間よりもかなり送られて来やがつて」

卓巳が携帯電話を取り出し時間を見せる。

「このままじやあ遅刻だ。走るぞー！」

そう言つと卓巳が走り出した。

何をしていたかを明確に説明しづらかった龍一は、何も言ひ返さずに、走り出した親友の後を無言で追つ。

学校には、あらざつで間に合つたが、これで今晩中に謝らなければならぬ女性が一人に増えた事になる。

姉の虎子と幼馴染の月美にだ。

気が重くなるが、これも皆、自分の責任だ。

頑張つて謝罪しようつと思つ龍一であつた。

## 遅刻寸前のハプニング

幼馴染に対して、路上で認めも憚らずにパンツを見せてくれと懇願したが為に、親友を道連れに駅から学校までの三キロ程をランニングするはめに成った龍一は、廊下で担任の女教師を追い抜いて教室に飛び込んだ。

龍一と卓巳の仲良しコンビに遅れて教室へと入つて来た担任女教師まなみ先生26歳が、やる気の薄い怒りかたで「お前ら、廊下を走っちゃ駄目だぞー」と二人を注意するが、二人は適当に聞き流して自分たちの席に急ぐ。

担任女教師まなみ先生は、サバサバとしたお姉さんタイプの先生である。

いつもジャージ姿でてきぱきと動く彼女は、気の強そうな口調で生徒や他の教師と接し、男っぽい面も多いがやたらと面倒見が良い出来た教師である。

よく見れば薄化粧を欠かさない女らしいところも掛け備えており、人当たりだけでなく容姿も運動神経も申し分なく、男女問わず生徒全般に人気が高い。

だが、独身である。

「ん？」

まなみ先生が教室に入ると、床に何か不自然な物が落ちているのを発見する。

「なんだ、これ？」

短めのポーテールを揺らしながらまなみ先生が、それを拾い上げた。

それとは、龍一の持ち物であるレースのハンカチだった。

慌てて教室に飛び込んだ時に、思わずポケットから落としてしまった物だ。

「誰だ〜、教室にパンティー落としたのは？」

三角に折られたレースのハンカチを拾い上げたまなみ先生が、ヒラヒラと振って生徒全員に見せる。

「女子諸君、ちゃんと履いているか〜？ 私はちゃんと履いているだ〜〜」

本物のパンツに見えた男子生徒達が双眸を見開き「おお〜〜」と猛烈ながら凝視するなか、女子生徒達がザワザワとどよめき自分の股間をスカートの上からさすって確認を取る。

女子生徒のAさんが言つ。

「まなみ先生。それ、ハンカチですよ……」

「あ、本当だ。私はてっきりパンティーかと思つたよ。つまり、ハンカチか〜」

女子生徒達が安堵に胸をなでるなか、男子生徒達はがっかりと落胆して見せる。

「そのハンカチ、さつき政所君が落としましたよ

龍一が落とすところを見ていたのだろうか、一人の女子生徒が報告する。

その生徒とは、いつも龍一が気を引こうと不順なテレパシーを飛ばしている憧れの女子であった。

隣の列の四つ前に座っている彼女の名前は、鹿沼 翡翠。

龍一が密かに思いを寄せている彼女は、容姿端麗頭脳明晰であるが、運動神経は零に等しいおつとり系である。天然な素振りも多い。

性格は素晴らしい良い子である。ハグしたら一生離れたくないなる程に可愛く、一つ一つの動作が可憐で育ちの良さをフローロモンと一緒に放出しているぐらいであった。

腰まで在る長い黒髪が、とても魅力的で、胸も大きい方である。

正直などこの結婚したい。もちろん将来的な希望である。

しかし、当然ながらライバルは無数である。

鹿沼翡翠は、校内全体の可愛い女子生徒ランキングで一年生の頃からベスト10内にランクインしている。

蓬松高校に通う男子生徒の多くがお墨付きを貰えるほどどの美少女なのだ。

「なんだ、政所。お前のハンカチか？」

まなみ先生がレースのハンカチを突き出しながら言いつ。

「男子が持ち歩くようなハンカチじゃないな。お前は、じひじうのが好きなのか？」

まなみ先生も意外だなと云いたげな顔をしていた。

「それは！」

慌てて席を立つた龍一が走つてハンカチを取りに行く。  
焦つて足が縛れながらも答える。

「母のハンカチを間違えて持つてきましたね！」

手に持つたハンカチを乱暴に奪われたまなみ先生は「そうか、つまらんな」と言うと主席簿を開いて朝の儀式を開始する。  
何がつまらないのかは不明であった。

ハンカチをポケットに捻じ込みながら龍一は、恥ずかしそうに自分の席に着いた。

帰り道で鹿沼翡翠と目が合つた。彼女は軟らかく微笑んでいたが、龍一は思わず顔を背けてしまう。とても恥ずかしかったのだ。

「よりによつて、何でだよ……」

咳きで愚痴る龍一。鹿沼翡翠に見られた事が悔いに成る。

ほんのちょっとの出来事であつたが、甘酸っぱい思いとして龍一の記憶に青春として刻まれた。

傷は浅い。

忘れよつ。

この程度のハプニングならば眞もが直ぐに忘れてくれるだらうと思つた。

しかし世間は許さない。

今後このネタは、しばらく尾を引く事に成るのであつた。

政所龍一が母のパンティーをハンカチ代わりに使つてゐると、謝つた噂が学年内に広まるので、僅か一日と掛からなかつたのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2845y/>

---

変態超能力をプレゼント

2011年11月30日21時50分発行